

第1講座「これからの大学図書館像 ～研究情報資源のアクセシビリティ～」

講師：元 藤女子大学准教授 下田 尊久 氏

本大会のテーマから大学図書館を考えるということで未来を拓く新時代の大学図書館像という形で話をしていきたい。北海道における大学を取り巻く環境の変化や大学図書館や図書館員に求められている役割について、とりわけ「研究情報資源のアクセシビリティ」をテーマにライブラリアンシップから探ってみたい。そしてそこに見える「これからの大学図書館像」とはどのようなものなのかをともに考えるきっかけになればと願っている。

概要

ライブラリアンシップについて。「Black&Muddiman コミュニティのための図書館(根本・三浦訳)」ではライブラリアンシップを図書館と訳している。そこに含まれる概念は幅広いものがある。そこで自ら大学図書館業務に携わった「大学図書館員」として、めざしてきたものや得られた使命感をもとに「すべての図書館の業にはライブラリアンシップがある」と仮定してみたい。

本大会のテーマを「未来を拓く新時代の大学図書館」と置き換えたとき、何を軸に図書館を考えたら良いのかがテーマになる。「D. Urquhart 図書館業務の基本原則(高山訳)」が示す「供給は需要を創る」という原則がある。これは大学図書館とりわけ研究情報資源においても成り立つのか、教育と研究を担う大学において内部組織としての使命と役割を軸に、研究情報資源を扱うライブラリアンシップを考えてみる。

道内大学を取り巻く環境の変化や図書館組織として、図書館員として求められる役割についても、「研究情報資源のアクセシビリティ」における大学間、研究領域間の公平性の確保の観点から探ってみたい。様々な建学の理念や組織の背景を持つ大学で働く図書館員が自らも立場の違いがある皆さんにとって「これからの大学図書館像」とはどのようなものなのか、またどのようになり得るのかを考えるきっかけになればと願っている。

大学図書館員にとってのライブラリアンシップ

図書館情報学用語辞典第5版では、ライブラリアンシップは図書館を運営する職業にかかわるあらゆる面がすべて含まれるとし、「図書館員という職業および図書館に関係する人々にかかわることの総体といった意味を持つ」と定義している。そこで理念・指標として、ランガナタンの「図書館学の五法則」(1932)は大学図書館員にとっても不変の基本原則となるか、国の審議会が示す「変革する大学にあって求められる大学図書館像」(2010)は21世紀の「これからの大学図書館像」の指標として活かされているのかをライブラリアンシップのなかで考えてみたい。そこで前提として

- ・大学図書館の仕事は即ち大学組織体の業務である
- ・大学図書館の役割は設置母体を支える情報拠点である
- ・大学図書館員の建学理念の追求は設置母体と図書館サービスを支える背骨のようなものである

と仮定してみた。今回の話の最後に共通理解としたい到達点は「図書館(員)のすべての業にはライブラリアンシップがある」ことであると考えた。

大学図書館事始め

■ 20世紀の大学図書館現場

自らの業務体験を振り返ってみると大きく3つの時代にわけられる。

’77～79年度：研究情報の文献複写による提供

’80～87年度：選書と研究情報のDBのオンライン代行検索による提供

’93～98年度：エンドユーザによる研究情報入手のための環境整備

■ 80年代後半の学びの模索

初めて「大学図書館国際シンポジウム」司書論（1988）に参加する。これは私にとって大学図書館の原点であり、そのことが現代においてどう違っているのかを考える機会となり、また大学図書館像を描くうえでこの基本は何も変わっていないことに気づかされた。

・「学術情報システムと大学図書館司書」（倉橋）では、学術情報センター(NACSIS)の誕生による図書館業務の変化を標準化と協働と位置付け、ハウスキーピング的図書館電算化から目録業務の共有化、独自システムからパッケージ化されたシステムによる標準化など電算化の意味は学術情報システムへの参加という意識の変換を強調された。

・「学術情報システムと司書課程」（古賀）では、図書館は、館種を問わず、常に社会のニーズに応えるものでなければならないこと、図書館員は、人類の発展に貢献するため将来を見据え変化に対応できる柔軟性が重要であること示していた。これらはランガナタンの5法則に繋がるものであり、大学図書館では、壁のない図書館の出現や研究に必要な情報のアクセシビリティがサービスの質として問われると指摘していた。また大学図書館員が研究調査法を身につけることや研究情報流通に関する調査研究の必要性、養成教育には組織における図書館経営の分野も含む必要がある点を強調されていた。

・現場の図書館員としての研究情報資源との関わり方については、文献情報提供者であると同時に研究情報資源の利用者であり研究者であること、研究情報資源へのアクセシビリティの確保は大学図書館の義務であることなど現在においても原点とすべき視点を挙げている。

■ 国内の国際会議

「図書館、情報に関する国際ラウンドテーブル会議」（参加 2006～2012）では、毎回、海外ゲストによるe-サイエンス、電子出版やICT環境についての講演があり非常に刺激になった。ゲストとの質疑や意見交換によって単なる最新情報ではなくその進化の過程や背景を得ることができた。

科学技術・学術審議会 学術情報基盤作業部会(報告)と「これからの大学図書館像」

「大学図書館の整備について—変革する大学にあって求められる大学図書館像—」（2010）の概要

- ・大学図書館の基本的機能は、高等教育及び学術研究活動全般を支える重要な学術情報基盤である
- ・大学の教育研究の中核を成す総合的な機能を担う機関の一つである

この大学図書館像が2010年に示されたのち、各大学はどのように受け止めてきたのか。この報告による政策に呼応しNIIと国公立大学図書館協力委員会の連携・推進のため協定が結ばれ「これからの学術情報システム構築検討委員会」が、2012年に設置された。また、10年後の現在、道内各大学の現状にはどのように反映されているか？「求められる大学図書館像(2010)」による継続的な検証・評価の必要性について、公共図書館における「これからの図書館像」（2006）を参

考に考えて見たい。この(公共)図書館像には、「住民にとって役立つ図書館としての存在意義を確立すること」とこれを実現する基盤として「図書館員の質の向上と経営評価等の経営改革の重要性」が示された。

■ **これからの大学図書館像の起点として**

「変革する大学にあって求められる大学図書館像 (2010)」の概要は次のような構成である。

1. 大学図書館の機能・役割及び戦略的な位置付け

- (1) 大学図書館の基本的機能
- (2) 環境の変化と大学図書館の課題
- (3) 大学図書館に求められる機能・役割**
- (4) 大学図書館の組織・運営体制の在り方



2. 大学図書館職員の育成・確保

- (1) 大学図書館の業務内容の変化を踏まえた
大学図書館職員の育成・確保の必要性
- (2) 大学図書館職員に求められる資質・能力等
- (3) 大学図書館職員の育成・確保の在り方

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/toushin/attach/1301607.htm

図書館の戦略・機能と図書館職員の育成確保が掲げられている点は「これからの図書館像」と同様である。ここでは1. (3)機能・役割に注目してみる。

■ **大学図書館に求められる機能・役割**

1. 学習支援及び教育活動への直接の関与

- ア. 学習支援：ラーニング・コモンズ、図書館職員等によるレファレンスサービスや学習支援
- イ. 教育活動の直接関与：ラーニング・コモンズ、図書館職員等による学習支援

2. 研究活動に即した支援と知の生産への貢献

- ・ 学術雑誌、図書、その他研究を進めるうえで必要な情報へのアクセスの確保
- ・ 研究プロセスに密着し、生産情報を組織化、次の研究活動に活かせるサイクル形成の基盤構築

3. コレクション構築と適切なナビゲーション

- ・ NII、JANUL コンソーシアム及び公私立大学図書館コンソーシアム (PULC) の連携
- ・ 多様な学術情報への的確で効率的なアクセスの確保 ⇒ JUSTICE の実現

4. 他機関・地域等との連携及び国際対応

- ・ 日本語の電子図書の出版社と連携、MLA 連携、海外の大学図書館との連携

とくに2. と3. は今回のテーマに関わるこれからの大学図書館像を考える上で重要である。

公共図書館の「これからの図書館像」との比較

「これからの図書館像」の対象は図書館法にもとづく公共図書館である。「読書」中心の考え方は維持しつつ、地域などステークホルダーのための「知の拠点」「地域を支える情報拠点」へのパラダイムシフトと、政策評価としてのサービス評価や職員の適正配置と質向上の重要性を示唆している。また、図書館経営の改革をそのプロセスに必要な機能と位置付けている点に注目する。PDCA サイクルを意識した改革は、課題は多いものの15年を経て漸くその評価公表のプロセスが定着化している。図書館法にある公共図書館の図書館像は、ユネスコ公共図書館宣言が掲げる「地

域の情報センター」の実現であり、民主主義の砦としての役割がそこに示されていることを再確認するものである。すなわち

- ・政策を経営目標とし実現するには鵜呑みにするのでなく活発な議論や模索が必要
- ・政策・理念をステークホルダーのものにするプロセスと成果の公表がその原動力
- ・成果の公表（可視化）がなければ持続的な成長は生まれない

大学図書館における「求められる大学図書館像」はどうだろうか？

■ 大学図書館としていま求められていること

- ・アクセシビリティとユーザビリティの検証
- ・情報資源の媒体とツールの変化への対応
- ・コアジャーナルの収集戦略
- ・レビュー論文による研究動向把握と情報提供
- ・良質な研究者育成のための学業成果の質保証
- ・大学紀要等インハウス・ジャーナルの機能検証
- ・学術情報システムの維持発展のための協働
- ・ハゲタカジャーナル対応 など

⇒ 図書館の母体組織の研究基盤強化に対する組織的関与を積極的に続けることが必要である

■ 研究情報資源のアクセシビリティと図書館サービス

- ・学術情報システムの動向 (2015 2017)
- ・学術機関リポジトリポータル (JAIRO から IRDB)
- ・機関リポジトリの機能検証と強化 (HUSCUP)
- ・ディスカバリーサービス (事例：大阪大学附属図)
- ・コレクション構築のマネジメント
- ・コンソーシアムの意義の学内普及 (JUSTICE)
- ・サイエンスコミュニケーター的な学術情報普及活動 (JASC)
- ・サイバー・サイエンス・インフラストラクチャ (CSI) の動向 (UPKI 構想)
- ・サブジェクト・ライブラリアンの可能性 (INFOSTA 特集その後)
- ・オープンサイエンスとオープンアクセスの動向 (JPCOAR)

⇒ 大学図書館の研究基盤づくりへの館員としての主体的関与の必要性がある。

すでに国立系や総合大学では先進的に研究や発信が進んで研究集団に対する貢献度を高めていると思うが、その環境を持たない図書館を擁する大学では、図書館員が日常的な業務に加えて学内課題を共有することが求められていると考えている。誰かが実現のための努力をする必要があり、共有のため発信が出来るのは図書館であると考え。

■ これからの大学図書館員の役割

- ・大学図書館
 - ・設置者、図書館員、ステークホルダーによる協働を軸とした業務で成り立つ
 - ・設置母体の法人には拘束されずに他組織と連携し機能し得る学内組織である
 - ・ステークホルダーとして研究情報資源の動向に積極的に関与する組織である
 - ・設置母体（大学）の「共生・協働を創り出す社会の役割」を支える学内組織となる
- ・大学図書館・図書館員の役割
 - ・政策的な方向性との整合性を図ることは設置母体を得る補助金とも繋がる

第1講座

- ・建学の理念の具現化の意識と追求は設置母体を支える背骨になる
 - ・地域社会との繋がりにおいて研究者と一般利用者を結ぶメッセンジャーとしての役割を持つ
- ⇒ こうした点を考えるために新しい動きに対して情報収集をすることが大事である

研究情報資源に関わる図書館員に期待されるもの

大学図書館員は、大学自体が学問研究を使命の一つとして担っていることを認識し、研究者と大学図書館それぞれが持つ多様化した学術情報を結びつける仲介者の機能をより一層充実させることが求められる。主題についての知識、とくに研究分野の知識と研究方法の理解が必要である。具体的には、特定の主題に関する深い知識を備えていることではなく、その学問分野についての知識と、学問研究をしていく道筋の理解である。また、研究過程で出される情報要求に、より適切な情報資源をより効率よく提供することを可能にするコミュニケーション力と発信力が求められる。

周知のようにすでに先進的な研究者との協働の試みは始まっている。オープンアクセス(OA)と研究データ公開支援など多くの事例が紹介されている。身近な活動事例としては三上氏(北大附図)が発信しているが、そうした環境を持たない大学図書館(員)にあってはNIIが進めている研究データ管理基盤形成(GakNin RDM)などを研究することが図書館員として求められている役割だろう。

「図書館におけるすべての業はライブラリアンシップに始まる」

これまでのことを大学図書館員の使命としてまとめてみる。

- ・研究情報資源の持続的なアクセシビリティの研究と確立
- ・研究活動・研究情報資源入手における公平性の確保
- ・先進的サービスをどこまで共有できるかの可能性の追求
- ・研究利用のための図書館環境の格差是正の努力
- ・学術研究情報の社会への還元普及のための働き

実際に道内の大学図書館員による自主的活動も行われている。

- ・北海道の図書館職員を中心とした有志による自主的な勉強会
- ・大学図書館研究会(大図研)北海道
- ・北海道大学附属図書館における研究支援情報サービスの試み
- ・北海道地区大学図書館職員研究集会の活用
- ・その他の多くの自主的な自己研鑽の活動 など

自らの「ライブラリアンシップ」で持続可能な「アクセシビリティ」へ

- ・図書館の持続可能な成長の原動力は技術的な進歩だけでは得られない
- ・図書館が研究活動に必須であることをステークホルダーが納得出来る根拠や理念・目標の明示によって共有することが必要である
- ・研究及び研究情報資源は研究者だけで完結する生産物ではない
- ・研究情報資源のより良いアクセシビリティには、情報提供や協働で研究を支える図書館員が必要
- ・図書館員が図書館の理念や図書館員の役割を自問し、互いに共有することがライブラリアンシップ醸成につながる
- ・図書館員のライブラリアンシップは、大学共同体の一員として、図書館員として、一人の市民として、図書館の理念や役割の共通基盤を形成する

第1講座

COVID-19 のパンデミックで新しい生活様式が求められるなか、今一度、自らのライブラリアンシップによって、公平な未来を拓く大学図書館を考えていただき、そのアクセシビリティ実現のために活躍されることを願う。

補足) スライド内参考情報源リスト (抜粋)

- A.ブラック, D.マディマン著; 根本彰, 三浦太郎訳. コミュニティのための図書館. 東京大学出版会, 2004
 - ※ お詫びと訂正: 公開時のスライド3枚目の Black&Madiman は正しくは Black&Muddiman
- D.アーカート著; 高山正也訳. 図書館業務の基本原則. 勁草書房 1985.6
- 21世紀への大学図書館国際シンポジウム 京都国際大学 <http://www.kufs.ac.jp/toshokan/simpo/shinpo1.htm>
- 沿革/国際会議開催の歴史 ライブラリーセンターについて. 金沢工業大学ライブラリーセンター https://www.kanazawa-it.ac.jp/kitlc/about/history_of_internationalconference.html
- これからの図書館像—地域を支える情報拠点をめざして— (報告) [概要] 文部科学省 https://warp.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1621348/www.mext.go.jp/b_menu/houdou/18/04/06032701/008/001.pdf
- 大学図書館の整備について (審議のまとめ) —変革する大学にあって求められる大学図書館像— 概要: 文部科学省 https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/toushin/attach/1306126.htm
- 大学図書館コンソーシアム連合: JUSTICEについて.概要 <https://www.nii.ac.jp/content/justice/overview/>
- ウェブアクセシビリティ | 国立国会図書館- <https://www.ndl.go.jp/jp/accessibility/index.html>
- 中央教育審議会大学分科会. "参考 第5期・中央教育審議会大学分科会のこれまでの審議における論点整理について: 第5期・中央教育審議会大学分科会の審議経過と更に検討すべき課題について". (2011.1.19) https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/attach/1302344.htm.
- ハゲタカジャーナル対応
 - ・北海道大学附属図書館研究支援課. "注意が必要な「怪しいジャーナル」". 研究支援情報 (北大構成員限定). https://www.lib.hokudai.ac.jp/support/predatory_journals/, (accessed 2021-7-31).
 - ・粗悪な学術誌「ハゲタカジャーナル」問題とは? 狙われる研究者 毎日新聞 2021/7/7 11:00 (最終更新 7/7 17:38) <https://mainichi.jp/articles/20210706/k00/00m/040/295000c> (有料記事)
- これからの学術情報システム構築検討委員会.
 - "これからの学術情報システムの在り方について". ドキュメント. <https://contents.nii.ac.jp/korekara/documents>
 - ・2015 [これからの学術情報システムの在り方について](#)(155.94 KB) 2015年5月29日.
 - ・2019 [これからの学術情報システムの在り方について \(2019\)](#) (492.97 KB) 2019年2月15日
- IRDB 学術機関リポジトリデータベースサポート <https://support.irdb.nii.ac.jp/ja>
- 北海道大学学術成果コレクション: HUSCAP (hokudai.ac.jp) <https://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/index.jsp>
- 機関リポジトリの再定義について (janul.jp) 国立大学図書館協会オープンアクセス委員会 2019年8月5日 https://www.janul.jp/sites/default/files/janul_redefining_the_institutional_repository_20190805.pdf
- 研究データのオープン化とそのメリット [OA_reportA_202004.pdf \(janul.jp\)](#), 国立大学図書館協会オープンアクセス委員会 2019年8月 https://www.janul.jp/sites/default/files/OA_reportA_202004.pdf
- オープンサイエンス及び研究データ管理に係る参考となる取組事例 (janul.jp) 国立大学図書館協会オープンアクセス委員会 2021年3月 https://www.janul.jp/sites/default/files/OA_report_202103.pdf
- 研究データ公開実践のための課題を探る [20210218_5.pdf \(nii.ac.jp\)](#) SPARC Japan 学術情報流通 https://www.nii.ac.jp/sparc/event/2020/pdf/20210218_5.pdf
- GakuNin RDM (研究データ管理基盤) | 国立情報学研究所 オープンサイエンス基盤研究センター <https://rcos.nii.ac.jp/service/rdm/>

(Web サイトはすべて 2021 年 7 月 31 日最終確認)